

# テサロニケ人への手紙第一

第5回聖書フォーラムキャンプ

---

基調メッセージ



メッセージ：中川健一

**ハーベスト・タイム・ミニストリーズ**

# 「テサロニケ人への手紙第一」

中川健一

## はじめに

### (1) 聖書フォーラム運動の広がり

聖書は靈感を受けて書かれた誤りなき「神のことば」である。

ヘブル的聖書解釈

イスラエルの役割の聖書的理解

終末論の重視

### (2) 今回は、テサロニケの教会から学ぶ。

異邦人の教会である。

パウロから直接教えを受けた。

終末論に関心を持っていた。

### (3) テサロニケという町

マケドニア属州の主要な港町

\* コリントはアカヤの主要な港町。

\* エベソは、アジアの主要な港町。

交通の要衝の町

\* エグナティア街道の町

\* (イリュリクム属州とマケドニア属州、トラキア属州を結ぶ街道)

\* パウロの時代、経済的にも、軍事的にも重要な町であった。

人口は約 20 万人と推定される。

\* 大半が土着のギリシア人。

\* 多くのローマ人もいた。

\* アジア人やユダヤ人もいた。

\* 経済活動が活発な町には、必ずユダヤ人がいた。

\* テサロニケのユダヤ人の会堂は、大きな力を持っていた。

\* 「神を敬う(神を恐れる)異邦人」も多くいた。

偶像礼拝がもたらす道徳的墮落が蔓延していた。

\* ユダヤ教の自制心のある教えに感動する異邦人もいた。

(4) パウロとテサロニケの教会(使 17:1~10)

- 17:1 彼らはアムピポリスとアポロニヤを通して、テサロニケへ行った。そこには、ユダヤ人の会堂があった。
- 17:2 パウロはいつもしているように、会堂に入って行って、三つの安息日にわたり、聖書に基づいて彼らと論じた。
- 17:3 そして、キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証して、「私があなたがたに伝えているこのイエスこそ、キリストなのです」と言った。
- 17:4 彼らのうちの幾人かはよくわかって、パウロとシラスに従った。またほかに、神を敬うギリシヤ人が大ぜいおり、貴婦人たちも少なくなかった。
- 17:5 ところが、ねたみにかられたユダヤ人は、町のならず者をかり集め、暴動を起こして町を騒がせ、またヤソンの家を襲い、ふたりを人々の前に引き出そうとして搜した。
- 17:6 しかし、見つからないので、ヤソンと兄弟たちの幾人かを、町の役人たちのところへひっぱって行き、大声でこう言った。「世界中を騒がせて来た者たちが、ここにも入り込んでいます。
- 17:7 それをヤソンが家に迎え入れたのです。彼らはみな、イエスという別の王がいると言って、カイザルの詔勅にそむく行いをしているのです。」
- 17:8 こうして、それを聞いた群衆と町の役人たちとを不安に陥れた。
- 17:9 彼らは、ヤソンとそのほかの者たちから保証金を取ったうえで釈放した。
- 17:10 兄弟たちは、すぐさま、夜のうちにパウロとシラスをベレヤへ送り出した。ふたりはそこに着くと、ユダヤ人の会堂に入って行った。

第2回伝道旅行(トロアス      ピリピ      テサロニケ      ベレヤ)

パウロがテサロニケに滞在した期間は、短い。

\*3週間にわたるユダヤ人伝道

\*それに続く異邦人伝道

ユダヤ人たちの迫害を避けるために、テサロニケを脱出した。

アウトライン

(パウロは、思索の流れるままに書いているので、それを区切るのは難しい)

. あいさつ(1:1)

. パウロとテサロニケの教会の関わり(1:2~3:13)

A. 感謝の言葉(1:2~10)

1. 感謝の理由(1:2~3)

2. より具体的な理由(1:4~10)

B. テサロニケでのパウロの宣教(2:1~16)

1. 福音の提示(2:1~12)

- 2. 福音の受容 (2:13~16)
- C. テサロニケ再訪の願い (2:17~3:13)
  - 1. パウロの計画 (2:17~20)
  - 2. テモテの派遣 (3:1~5)
  - 3. テモテの報告 (3:6~10)
  - 4. パウロの祈り (3:11~13)
- . 教えと適用 (4:1~5:24)
  - A. クリスマン生活 (4:1~12)
    - 1. 日々の歩み (4:1~2)
    - 2. 性的純潔 (4:3~8)
    - 3. 兄弟愛 (4:9~12)
  - B. 携挙 (4:13~18)
  - C. 再臨への備え (5:1~11)
    - 1. 主の日 (5:1~5)
    - 2. 慎み深い歩み (5:6~11)
  - D. 教会生活 (5:12~15)
    - 1. 指導者への態度 (5:12~13)
    - 2. 互いに対する責任 (5:14~15)
  - E. 清い生活 (5:16~24)
    - 1. 個人的生活 (5:16~18)
    - 2. 共同体としての生活 (5:19~22)
    - 3. 超自然的助け (5:23~24)
- . むすび (5:25~28)
  - A. 個人的願いと勧告 (5:25~27)
  - B. 祝祷 (5:28)

## . あいさつ (1:1)

### 1. 執筆の動機 (1:1)

1:1 パウロ、シルワノ、テモテから、父なる神および主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会へ。恵みと平安があなたがたの上にありますように。

(1) テサロニケ教会は、パウロの第2回伝道旅行の時に誕生した。

通常は、神の計画の全貌(教理)を教え、長老を任命し、次の町に移動した。

パウロはもっと長く留まって、新しく信徒となった者たちを訓練したかった。

しかし、迫害のためにそこを急に去らなければならなくなった。

当時コリントに滞在していたパウロは、テモテをテサロニケに派遣した。

テモテは、テサロニケの教会がしっかり立っているとの知らせをもたらした。  
パウロは大いに慰められた（3：6～7）。  
と同時に、患難の中で励ましと教育を必要としていることも知らされた。  
そこで、その教会宛に2通の手紙を書くことになった。

## (2) 第1の手紙

再臨に関する誤解を解くのが主な目的である。  
再臨がすぐに来ると信じ、怠惰になり他人に負担をかけるような者が出ていた。

## 2. あいさつの内容：ギリシア・ローマ時代の手紙には、3つの要素が含まれていた。

### (1) 差出人：

著者はパウロ。  
\*ヘブル名はサウロ（シャウール）、「切望された者」という意味。  
\*ラテン名はパウロ（パウロス）、「小さい」という意味。  
テサロニケ伝道に関係した2人の同労者の名が上がっている。  
\*シルワノ（シラスのラテン名）は、市民権を持つエルサレム出身のユダヤ人。  
\*テモテは、ルステラ出身で、母はユダヤ人、父はギリシア人。  
パウロ、シルワノ、テモテの3名の名があることへの信者の反応。

### (2) 宛先人：

「父なる神および主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会」  
「イエス・キリストは主である」との告白がなければ、教会とは言えない。  
彼らは、この世から「いのち」に呼び出された人々である。  
彼らは、テサロニケの町にあって特別な人々である。

### (3) あいさつの言葉：

パウロは、すべての手紙の中で、「恵みと平安」という言葉を使っている。  
常に、この順番で出て来る。  
恵みはイエスによって表された。その恵みを受け取った人が味わうのが平安。

## ・パウロとテサロニケの教会の関わり（1：2～3：13）

### A. 感謝の言葉（1：2～10）

#### 1. 感謝の理由（1：2～3）

- 1:2 私たちは、いつもあなたがたすべてのために神に感謝し、祈りのときにあなたがたを覚え、  
1:3 絶えず、私たちの父なる神の御前に、あなたがたの信仰の働き、愛の労苦、主イエス・キリストへ

の望みの忍耐を思い起こしています。

(1) パウロはこの手紙を、他の手紙と同じように感謝の言葉をもって始めている。

テサロニケの信者のために、「いつも」神に感謝し、祈っている。

パウロの祈りは、継続的な祈りである。

感謝の源になる人は、幸いである。

(2) この教会の3つの特徴(パウロの心に浮かんだ特徴)

信仰の働き(信仰が生んだ行為。過去)

\* 救いは信仰と恵みによるが、信仰は行為によって表現される。

\* 真の信仰とは、行ないの伴ったものである。

\* そういう意味で、テサロニケの信者は正しい信仰理解を持っていたと言える。

愛の労苦(キリストの愛への応答。現在)

\* 彼らの信仰は、神への愛、また隣人への愛となって具体的な形を取った。

\* 労苦とあるので、大きな犠牲を払って愛を実践していたことが分かる。

望みの忍耐(望みがもたらす忍耐。未来)

\* 彼らが試練の中でも信仰を持ち続けることができたのは、希望があったから。

\* その希望とは、キリストの復活と再臨から来るものであった。

(3) 信仰、愛、希望の重要性

## 2. より具体的な理由(1:4~10)

(1) パウロの確信(1:4~6)

1:4 神に愛されている兄弟たち。あなたがたが神に選ばれた者であることは私たちが知っています。

1:5 なぜなら、私たちの福音があなたがたに伝えられたのは、ことばだけによったのではなく、力と聖霊と強い確信とによったからです。また、私たちがあなたがたのところへ来たのは、あなたがたのために、どのようにふるまったかは、あなたがたが知っています。

1:6 あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちが主とにならう者になりました。

「兄弟たち」という呼びかけ

\* 救われた者は、主の前にみな同じである。

\* 高慢なパリサイ人から、異邦人信者を兄弟と呼ぶ謙遜への変化を遂げた。

テサロニケの信者が、神によって選ばれた人々であることを確信している。

\* その選びは、永遠の昔から定められていたものである(エペ1:4参照)

\* 選びによって、この世から呼び出されたのである。

確信の理由は、ここでの宣教が「力と聖霊と強い確信」によってなされたから。

\* 神の超自然的な働きによって、彼らは救われた。

\*これは、彼らの救いが神の計画によるものであることを証明している。

\*パウロは、自分の体験と重ね合わせている。

福音を聞いた彼らも、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れた。

\*しかも、多くの苦難が予想される中で、決断した。

\*神の選びと、人間の応答が、ともに教えられている。

\*環境が、喜びの量を決めるわけではない。

彼らは、宣教師たちに倣う者、主イエスに倣う者となった。

## (2) マケドニアとアカヤの信者の模範(1:7~8)

1:7 こうして、あなたがたは、マケドニアとアカヤとのすべての信者の模範になったのです。  
1:8 主のことばが、あなたがたのところから出てマケドニアとアカヤに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰はあらゆる所に伝わっているので、私たちは何も言わなくてよいほどです。

彼らは、使徒たちの信仰の姿勢に影響を受け、その生き方に倣う者となった。

その結果彼らは、マケドニアとアカヤの他の信者の模範となった。

パウロは新しい場所に行くと、それまでの宣教の結果を分かち合っていた。

しかし、テサロニケの教会に関しては、それをする必要がない。

彼ら自身が、言葉と行ないによってその信仰を他の地区に宣べ伝えていた。

## (3) 偶像から神に立ち返る(1:9~10)

1:9 私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、  
1:10 また、神が死者の中からよみがえらせなされた御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちが救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。

テサロニケは偶像に満ち満ちた町で、彼らもまた偶像礼拝の中にいた。

しかし、福音のメッセージを聞いた時、急激に方向転換した。

その結果、彼らは、生けるまことの神に仕えるようになった。

さらに、神がキリストを死者の中から甦らせたことを信じるようになった。

また、そのキリストが再臨されるのを待ち望むようになった。

\*「やがて来る御怒り」とは、大患難時代のことである(黙6~19章)。

この希望があったので、彼らは患難の中でも忍耐と確信を失うことがなかった。

旧約時代の聖徒は、メシアの到来を待ち望んだ。

新約時代の聖徒は、メシアが到来したことと、復活したことを知っている。

今私たちが待ち望んでいるのは、メシアである主イエスの再臨である。

私たちは、終末時代の裁きから解放されている。

私たちは、旧約時代の聖徒たちよりはるかに多い啓示を受け取っている。

## B．テサロニケでのパウロの宣教（2：1～16）

### 1．福音の提示（2：1～12）

#### （1）使徒としての伝道姿勢（2：1～6）

- 2:1 兄弟たち。あなたがたが知っているとおり、私たちがあなたがたのところに行ったことは、むだではありませんでした。
- 2:2 ご承知のように、私たちはまずピリピで苦しみに会い、はずかしめを受けたのですが、私たちの神によって、激しい苦闘の中でも大胆に神の福音をあなたがたに語りました。
- 2:3 私たちの勧めは、迷いや不純な心から出ているものではなく、だましごとでもありません。
- 2:4 私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。
- 2:5 ご存じのとおり、私たちは今まで、へつらいのこぼれを用いたり、むさぼりの口実を設けたりしたことはありません。神がそのことの証人です。
- 2:6 また、キリストの使徒たちとして権威を主張することもできたのですが、私たちは、あなたがたからも、ほかの人々からも、人からの名誉を受けようとはしませんでした。

パウロは、自分の伝道姿勢を振り返り、自己弁明を試みている。

その理由は、敵対する者たちが、彼についての悪評を吹聴していたから。

パウロの一行は、不純な動機でテサロニケに伝道に来たのではない。

かつてパウロは、ピリピで鞭打ちの刑を受けた。

\*ローマの市民権を持っているのに、このような仕打ちを受けた。

そのような痛みと辱しめの中にありながら、テサロニケで伝道が行われた。

それが出来たのは、神の助けと力が備えられたから。

パウロの宣教は、迷い、誤り、不純な心、だましごとなどから出たものではない。

\*全国を巡回する偽哲学者たちとの区別

彼は、人を喜ばせるためではなく、神を喜ばせようとして奉仕をしている。

自分は神から承認され、宣教の使命を委ねられているという自己認識があった。

へつらいの言葉を用いたり、むさぼりの口実を設けたりしたことはない。

使徒としての権威を主張することもできたが、そうしなかった。

#### （2）母のように（2：7～10）

- 2:7 それどころか、あなたがたの間で、母がその子どもたちを養い育てるように、優しくふるまいました。
- 2:8 このようにあなたがたを思う心から、ただ神の福音だけではなく、私たち自身のいのちまでも、喜んであなたがたに与えたいと思ったのです。なぜなら、あなたがたは私たちの愛する者となったからです。
- 2:9 兄弟たち。あなたがたは、私たちの労苦と苦闘を覚えているでしょう。私たちはあなたがたのだれにも負担をかけまいとして、昼も夜も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えました。

2:10 また、信者であるあなたがたに対して、私たちが敬虔に、正しく、また責められるところがないようにふるまったことは、あなたがたがあかしし、神もあかししてくださることです。

パウロは、母がその子どもたちを養い育てるように、優しく振る舞った。

彼ら愛する愛のゆえに、自分たちの命さえも与えたいと思った。

人々に金銭的な負担をかけまいとして自らの手で働いた。

\* 福音のために働く人は、そこから生活の糧を得てもおかしくはない。

\* しかしパウロは、いらぬ誤解を与えないために、自給伝道を行なった。

「敬虔に、正しく、責められるところがないように」活動した。

### (3) 父のように (2:11~12)

2:11 また、ご承知のとおり、私たちは父がその子どもに対してするように、あなたがたひとりひとりに、

2:12 ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じました。

しかしパウロは、ただ優しいだけの伝道者ではない。

父が子を育て訓練するように、新しい信者たちを育て導いた。

彼は、新しい信者に勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じた。

## 2. 福音の受容 (2:13~16)

### (1) 福音への応答 (2:13)

2:13 こういうわけで、私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたは、私たちから神の使信のことは受け取ったとき、それを人間のことはとしてではなく、事実どおりに神のことはとして受け入れてくれたからです。この神のことは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。

パウロは神に感謝している。テサロニケの人々が、素直に福音を受け入れたから。

パウロのことはを「人間のことはとしてではなく、神のことはとして」受け入れた。

神のことはは、それを受け入れた人の中で働き始める。

### (2) 迫害の中での忍耐 (2:14~16)

2:14 兄弟たち。あなたがたはユダヤの、キリスト・イエスにある神の諸教会にならう者となったのです。彼らがユダヤ人に苦しめられたのと同じように、あなたがたも自分の国の人に苦しめられたのです。

2:15 ユダヤ人は、主であられるイエスをも、預言者たちをも殺し、また私たちをも追い出し、神に喜ばれず、すべての人の敵となっています。

2:16 彼らは、私たちが異邦人の救いのために語るのを妨げ、このようにして、いつも自分の罪を満たしています。しかし、御怒りは彼らの上に臨んで窮みに達しました。

テサロニケの信者は、主イエスと使徒たちに倣う者となった（1：6 参照）。さらに、ユダヤの、キリスト・イエスにある神の諸教会に倣う者ともなった。ユダヤの諸教会では、ユダヤ人信者が同胞たちによって迫害された。同様に、テサロニケの信者たちも、同国人から苦しめられるようになった。クリスチャンが試練に会うのは異常なことではなく、むしろ普通。パウロは、主イエスを拒否し、信者を迫害するユダヤ人たちを責めている。と同時に、同胞のために心を痛めている。彼は、イスラエルが民族的な救いを体験する日が必ず来ることも信じている。

## C. テサロニケ再訪の願い（2：17～3：13）

### 1. パウロの計画（2：17～20）

#### （1）サタンの妨げ（2：17～18）

2:17 兄弟たちよ。私たちは、しばらくの間あなたがたから引き離されたので といっても、顔を見ないだけで、心においてではありませんが、 なおさらのこと、あなたがたの顔を見たいと切に願っていました。

2:18 それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。このパウロは一度ならず二度までも心を決めたのです。しかし、サタンが私たちを妨げました。

テサロニケを去ってから何が起こったのか報告している。

町を追い出されたパウロの一行は、深い悲しみに落とされた。

\* 霊の子どもである彼らと引き離されたから。

\* しかし、その離別は肉体的なものであって、心まで引き離されたわけではない。

テサロニケの信者を慕うパウロは、彼らのもとに帰ってまいろうとした。

しかし、一度ならず二度までもサタンに妨げられた。

\* サタンの妨げとは、恐らく民衆の暴動のことを指すのであろう。

#### （2）パウロの誇り（2：19～20）

2:19 私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか。

2:20 あなたがたこそ私たちの誉れであり、また喜びなのです。

パウロの個人的な愛の表明（このような言葉は、この教会にだけ語られた）

パウロは、主の再臨の日までに、彼らの信仰が完成することを確信していた。

彼らの救いの完成は、パウロにとっては喜びであり、誉れでもある。

パウロが戻ってこないのは、愛がないからではない。

### 2. テモテの派遣（3：1～5）

3:1 そこで、私たちはもはやがまんできなくなり、私たちだけがアテネにとどまることにして、

3:2 私たちの兄弟であり、キリストの福音において神の同労者であるテモテを遣わしたのです。それは、

- あなたがたの信仰についてあなたがたを強め励まし、
- 3:3 このような苦難の中にあっても、動揺する者がひとりもないようにするためでした。あなたがた自身が知っているとおりに、私たちはこのような苦難に会うように定められているのです。
- 3:4 あなたがたのところにいたとき、私たちは苦難に会うようになる、と前もって言っておいたのですが、それが、ご承知のとおり、はたして事実となったのです。
- 3:5 そういうわけで、私も、あれ以上はがまんができません、また誘惑者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦がむだになるようなことがあってはいけないと思って、あなたがたの信仰を知るために、彼を遣わしたのです。

信者の霊的状态を心配したパウロは、テモテを派遣した。

試練の中にある彼らを励まし、教え導くため。

テモテは、パウロにとっては伝道の同労者であり、一番弟子でもある。

キリストのゆえにクリスチャンが迫害や患難に遭遇するのは当然のこと。

パウロは、人々がサタンの誘惑に陥り、信仰をなくすことを心配している。

### 3. テモテの報告(3:6~10)

- 3:6 ところが、今テモテがあなたがたのところから私たちのもとに帰って来て、あなたがたの信仰と愛について良い知らせをもたらしてくれました。また、あなたがたが、いつも私たちのことを親切に考えていて、私たちがあなたがたに会いたいと思うように、あなたがたも、しきりに私たちに会いたがっていることを、知らせてくれました。
- 3:7 このようなわけで、兄弟たち。私たちはあらゆる苦しみと患難のうちにも、あなたがたのことで、その信仰によって、慰めを受けました。
- 3:8 あなたがたが主であって強く立っていてくれるなら、私たちは今、生きがいがあります。
- 3:9 私たちの神の御前にあって、あなたがたのことで喜んでいる私たちのこのすべての喜びのために、神にどんな感謝をささげたらよいでしょう。
- 3:10 私たちは、あなたがたの顔を見たい、信仰の不足を補いたいと、昼も夜も熱心に祈っています。

テモテは良い知らせを持って帰還した。

\*パウロは、ベレア アテネ コリントと移動した。

テサロニケの信者たちは、患難の中でも揺らくことなく強く信仰に立っていた。

信仰に入って日の浅い彼らが強く信仰に立っているのは、まさに神の恵み。

彼らは、パウロやテモテのことを心にかけて、しきりに会いたがっていた。

パウロは、この喜びを与えてくださった神に感謝をささげる方法を考えている。

さらにパウロは、テサロニケの信者のためにとりなしの祈りを捧げている。

パウロには、心残りなことがあった。

\*突如去ることになったので、福音の全貌を教えることができなかった。

\*再会して、教えの不足を補いたかった。

### 4. パウロの祈り(3:11~13)

- 3:11 どうか、わたしたちの父である神御自身とわたしたちの主イエスが、わたしたちにそちらへ行く

道を開いてくださいますように。

3:12 どうか、主があなたがたを、お互いの愛とすべての人への愛とで、豊かに満ちあふれさせてくださいますように、わたしたちがあなたがたを愛しているように。

3:13 そして、わたしたちの主イエスが、御自身に属するすべての聖なる者たちと共に来られるとき、あなたがたの心を強め、わたしたちの父である神の御前で、聖なる、非のうちどころのない者としてくださるよう、アーメン。

道が開かれるようにという祈り

\* テサロニケを訪問する機会が与えられるように祈り求めている。

彼らの愛が増し加わるようにという祈り

\* 自分たちが彼らを愛していることを確認してから、この祈りを捧げている。

\* 信者同士の間、愛が増し加わりますように。

\* 「すべての人」(教会外の人)への愛も、増し加わりますように。

彼らの心が強められるようにという祈り

\* これは、神と人への奉仕を可能にする力となる。

\* 主イエスの再臨を前提に、この祈りを祈っている。

## ・ 教えと適用 (4:1~5:24)

### A. クリスマン生活 (4:1~12)

#### 1. 日々の歩み (4:1~2)

4:1 終わりに、兄弟たちよ。主イエスにあって、お願いし、また勧告します。あなたがたはどのように歩んで神を喜ばすべきかを私たちから学んだように、また、事実いまあなたがたが歩んでいるように、ますますそのように歩んでください。

4:2 私たちが、主イエスによって、どんな命令をあなたがたに授けたかを、あなたがたは知っています。

「終わりに」とは、最後の重要な項目(本論)に入るという意味である。

パウロは、教理上の誤解、また実際生活の誤解を正そうとしている。

クリスマンの行動の動機は、神への愛(神を喜ばせること)である。

学びの目的は、すでに実行していることをさらに進めることである。

\* 時には、新しい教えを学ぶよりも、知っていることの再確認の方が重要。

パウロは、主イエスの權威によって語ったし、今も語っている。

4:1~2は総論的な勧めであり、次に2つの具体的な勧めが続く。

#### 2. 性的純潔 (4:3~8)

4:3 神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。あなたがたが不品行を避け、

4:4 各自わきまえて、自分のからだを、聖く、また尊く保ち、

4:5 神を知らない異邦人のように情欲におぼれず、

4:6 また、このようなことで、兄弟を踏みつけたり、欺いたりしないことです。なぜなら、主はこれら

すべてのことについて正しくさばかれるからです。これは、私たちが前もってあなたがたに話し、きびしく警告しておいたところです。

4:7 神が私たちが召されたのは、汚れを行わせるためではなく、聖潔を得させるためです。

4:8 ですから、このことを拒む者は、人を拒むのではなく、あなたがたに聖霊をお与えになる神を拒むのです。

「神のみこころは、あなたがたが聖くなることです」。私たちのゴールでもある。

\* 「聖い」とは、罪から離れ、神のものとして分離されている状態である。

\* この状態は、「プロセス（過程）」である。

\* 聖霊の助けによって「自制心」を働かせることである。

テサロニケは、ギリシア・ローマの異教的文化にどっぷりと浸かった町。

\* 町には、娼婦たちもいた。

\* そういう町に住んでいると、いつの間にか、罪が罪として認識されなくなる。

\* 娼婦との交渉、婚前交渉、婚外交渉、同性愛などがあたり前になっていた。

\* 不品行とは、幅広い概念で、これらすべてを含む。

\* それに罪悪感を抱く人はごくまれであった。

パウロは、罪について誤解しないように、神の聖さの基準を教えている。

\* 不品行を避けるように。

\* 自分のからだを、聖く、また尊く保つように。

\* 真の神を知らない異邦人のように、情欲におぼれることのないように。

\* 神への応答が、誘惑に勝利する秘訣である。

不品行は、相手の人にも罪を犯させることになる。

\* 「兄弟」とは、必ずしも教会内の信者のことではない。

もし不品行な生活を続けるなら、その罪に対して聖なる神の正しい裁きが下る。

神がクリスチャンを召されたのは、聖潔を得させるためである。

\* イエスを救い主と信じた者はみな、「聖化の歩み」へと召された。

\* この教えを拒む人は、聖霊を与えてくださる神を拒んだことになる。

\* そのような人には、聖化の可能性が残されていない。

### 3. 兄弟愛（4：9～12）

#### （1）兄弟愛の実践（4：9～10）

4:9 兄弟愛については、何も書き送る必要がありません。あなたがたこそ、互いに愛し合うことを神から教えられた人たちだからです。

4:10 実にマケドニヤ全土のすべての兄弟たちに対して、あなたがたはそれを実行しています。しかし、兄弟たち。あなたがたにお勧めします。どうか、さらにますますそうであってください。

パウロは、彼らが愛を実践していることをほめている。

\* 彼らをほめる目的は、彼らを傲慢にするためではない。

\* 逆に、彼らが愛においてますます成長するためである。  
 新しい信者であっても、互いに愛し合うことを神から教えられている。  
 マケドニヤ全土 (ピリピ、ベレア、その他のクリスチャンが住んでいる町々)  
 パウロは、兄弟愛をさらに実践するように勧めている。

## (2) 労働の必要性 (4 : 11 ~ 12)

4:11 また、私たちが命じたように、落ち着いた生活をするを志し、自分の仕事に身を入れ、自分の手で働きなさい。  
 4:12 外の人々に対してもりっぱにふるまうことができ、また乏しいことがないようにするためです。

テサロニケ教会には、労働を軽視し浮き足立った歩みをしていた人たちがいた。それは、主イエスの再臨について誤解があったからである。  
 パウロは、過ちを矯正するために、「落ち着いた生活をするように」と命じた。「自分の仕事」(イディオス)とは、「自分に関することがら」である。

\* 箴 25 : 17

「隣人の家に、足しげく通うな。彼があなたに飽きて、あなたを憎むことがないようにせよ」

\* つまりパウロは、過剰な再臨信仰や他者へのお節介に対して警告を発した。  
 \* 喜びに満ちた状態と、過熱した状態とは、別ものである。  
 労働しない人々は、日常の仕事を軽視し、教会や家族に経済的負担をかけていた。  
 \* それは決して、教会外の人たちへのよい証しにはならない。  
 \* 信者は、仕事を忠実に行なうことによって生活の糧を得、神に栄光を帰す。  
 \* これ自体が、教会外の人たちへの証しとなる。

## B . 携拳 (4 : 13 ~ 18)

### (1) テーマの紹介 (4 : 13)

4:13 眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。

テサロニケの信者の教理的弱点 : 携拳のテーマが紹介される。  
 新しい信者なので、知らないのは当然である。「兄弟たち」と呼んでいる。  
 パウロは、テモテの報告によって彼らの教理的弱点を知ったのであろう。  
 パウロがテサロニケを去ってから、死んだ者たちが何人か出てきた。  
 \* 「眠った人々」とは、死の婉曲的な表現である (信者にのみ使用する)。  
 \* 肉体の眠りであって、魂の眠りではない。  
 テサロニケの信者たちはある疑問を持つようになった。  
 \* 「死んだ者たちは、携拳の際にはその祝福に与ることができないのか」  
 携拳 (いわゆる空中再臨) とは、信者が生きたまま天に上げられることを指す。

## (2) 復活の希望 (4 : 14 ~ 15)

- 4:14 私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずですよ。
- 4:15 私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。

愛する者が死んだ時、悲しみを感じるのは当然である。

しかし信者は、望みのない不信者のように悲しむ必要はない。

イエスは死んで復活された。

イエスにあって死んだ者には、復活の希望が与えられている。

主イエスの教えに従って言うと：

\* 携挙の時には、死んだ者は甦り、天に挙げられる。

\* 生きている者が、死んだ者に優先するようなことは決してない。

## (3) 携挙の預言 (4 : 16 ~ 18)

- 4:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、
- 4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。
- 4:18 こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。

主イエスご自身が天から下って来られる。

\* 主イエスは、今は父なる神の右の座に座しておられる。

\* 雲に包まれて天に上られた主イエスが戻って来られる (使 1 : 11)。

号令がかかる。これは、軍隊用語で、サタンとの最後の戦いを暗示させる。

御使いのかしらの声が響く。これは、天使ミカエルのことである。

神のラッパが鳴り響く。

1 コリ 15 : 52

「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです」

キリストにある死者が先ず甦る。

\* 「キリストにある死者」とは、教会時代の聖徒たちである。

\* 旧約時代の聖徒たちは、患難期の終わりに甦る (ダニ 12 : 2)。

次に、生き残っている者が、瞬時に携挙される。

「私たちは、いつまでも主とともにいることになる」

\* パウロは、自分が生存している間に携挙がある可能性を排除していない。

\* 携挙された聖徒たちは、主イエスが整えた場所に行く (ヨハ 14 : 2 ~ 3)。

\*パウロにとっては、主イエスとともにいることの方が重要な事実である。

この教理の適用は、慰めである。

\*「こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい」

携拳や再臨の希望を語らないキリスト教は、聖書的キリスト教ではない。

## C. 再臨への備え (5:1~11)

### 1. 主の日 (5:1~5)

- 5.1 兄弟たち。それらがいつなのか、またどういう時かについては、あなたがたは私たちに書いてもらう必要がありません。
- 5.2 主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。
- 5.3 人々が「平和だ。安全だ」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。
- 5.4 しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。
- 5.5 あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもだからです。私たちは、夜や暗やみの者ではありません。

携拳について語ったパウロは、次に主の日について解説している。

\*「主の日」とは、旧約聖書でよく使われる言葉で、神の裁きの日を指す。

\*新約時代に生きる私たちはこれを、大患難時代（患難期）と呼んでいる。

大患難時代がいつ来るかは誰にも分からない。

\*クリスチャンは、それが「夜中の盗人のように来る」ということを知っている。

\*人々が油断して生活している時に来ることも知っている。

\*それは、陣痛の苦しみが妊婦を襲うように突如やって来る。

キリストご自身がそう教えておられる（使1:7）。

\*世の終わりを予告する人がいるなら、その人の教えは聖書的とは言えない。

パウロは、信者と未信者とを対比させている。

\*信者は大患難時代を通過しない。

\*未信者は暗闇の中にいるので、主の日は盗人のように彼らを襲う。

\*信者は暗闇の中にはいないので、そうなることはない。

\*信者はみな、光の子ども、昼の子どもであり、夜や暗闇の者ではない。

クリスチャンの希望は、大患難時代を通過しなくてもよいということにある。

### 2. 慎み深い歩み (5:6~11)

- 5.6 ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。
- 5.7 眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです。
- 5.8 しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶるとしてかぶって、慎み深くしていきましょう。
- 5.9 神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあって救い

を得るようにお定めになったからです。

5:10 主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです。

5:11 ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。

未信者は眠っている。

\* 霊的な目が開かれておらず、夢を見ているか、酔ったような状態にある。

信者は「光の子ども」となった。

\* この世の人たちのような生き方をしなくなった。

パウロは、光の子としていかに歩むかの助言を与えている。

眠っていないで、目を覚まして、慎み深くしているように。

\* 不道徳の中で生活しないように。

信仰と愛を胸当てとして着けるように。

\* これは、闇の力と戦うためである。

救いの望みをかぶるとしてかぶるように。

\* 文脈では、大患難時代から救われるという希望。

\* 敵の攻撃や誘惑に勝利する力となる。

神の計画が私たちの上にある。

\* 私たちが御怒り（大患難時代）に会うようにお定めになったのではない。

\* 主イエス・キリストにあって救いを得るようにお定めになった。

「目ざめていても、眠っていても、」の意味

\* 目ざめているとは、霊的に健全な状態（グレイゴリユーオウ。6節と同じ）

\* 眠っているとは、霊的に無関心な状態（カスユードウ。6、7節と同じ）

\* つまり、霊的に無関心の人でも、真に救われているなら携挙される。

\* 信者としての褒章は、両者で異なる。

\* 一度救われた人が、救いを失うことはない。

## D. 教会生活（5：12～15）

### 1. 指導者への態度（5：12～13）

5:12 兄弟たちよ。あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあってあなたがたを指導し、訓戒している人々を認めなさい。

5:13 その務めのゆえに、愛をもって深い尊敬を払いなさい。お互いの間に平和を保ちなさい。

パウロはテサロニケの信者に、指導者を尊敬するようにと願っている。

\* その前提に、霊的指導者は忠実に主の働きをしているという理解がある。

指導者たちは信徒を指導し、訓戒し、教会を建て上げるわざに励んでいる。

\* 彼らの忠実な働きによって、再臨を待ち望む信仰が育まれる。

### 2. 互いに対する責任（5：14～15）

- 5:14 兄弟たち。あなたがたに勧告します。気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。
- 5:15 だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの中で、またすべての人に対して、いつも善を行うよう務めなさい。

教会生活は、お互いに責任を持ち合う共同体生活、家族生活である。

責任をすべて指導者に委ねるのではなく、互いに重荷を負い合うべきである。

気ままな者を戒める。

\* 「気ままな者」とは、仕事にも就かずに、怠惰な生活を送っている者のこと。

小心な者を励ます。

\* 「小心な者」とは、愛する者を失くした悲しみから立ち直れない者。

\* この世の迫害や誘惑に負けてしまう者など。

弱い者を助ける。

\* 「弱い者」とは、信仰や聖書理解が弱い者。

すべての人に寛容であること。

復讐するのではなく、いつも善を行なうように励むこと。

## E. 清い生活 (5:16~24)

### 1. 個人的生活 (5:16~18)

- 5:16 いつも喜んでいなさい。
- 5:17 絶えず祈りなさい。
- 5:18 すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

(1) いつも喜んでいなさい。

この喜びは、キリストにある喜び、御霊による喜びである。

喜びは、「御霊の実」の1つである (ガラ5:22)。

この喜びは、この世の人たちが味わう喜びとは根本的に異なる。

\* 罪赦されたという確信から来る喜び。

\* 永遠の命の希望があるという喜び。

\* 再臨の主イエスに会うことができるという喜び。

\* 一時的なものではなく、いつまでも続く喜び。

(2) 絶えず祈りなさい。

常に神に信頼する姿勢を教えたもの。

何をするにも神の助けを求めるという習慣を育てるように、教えたもの。

神の恵みがなければ、主の働きは何一つできないことを覚える。

(3) すべての事について、感謝しなさい。

これは、不幸や悲劇をも感謝せよという意味ではない。

感謝する対象は、神である。

どのような状況が襲ってきても、常に神に感謝することができる。

ともにいて、私たちが患難から救い出してくださる神に感謝することができる。

神はすべてを益に変えてくださると信じるがゆえに、感謝することができる。

## 2. 共同体としての生活（5：19～22）

5:19 御霊を消してはなりません。

5:20 預言をないがしろにはしてはいけません。

5:21 しかし、すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい。

5:22 悪はどんな悪でも避けなさい。

### （1）御霊を消してはならない。

御霊は、「火」としてイメージされている。

御霊の動きは、肉的な思いや不信仰によって消されていく。

### （2）預言をないがしろにはいけない。

新約聖書が完結するまでは、預言の賜物の行使が必要であった。

新約聖書の完成とともに、預言の賜物はなくなった。

この書簡の時代は、預言の賜物が行使されていた。

テサロニケの教会では、その重要性が認識されていなかった。

\* 携挙、再臨に関しても、人間の考え方が優先されていた可能性がある。

\* 現代でも、啓示されたみことば以上に、人間の教えが重視されることがある。

### （3）すべてのことを見分ける。

預言の賜物を行使する人が現われた場合、それを見分ける必要がある。

御霊の賜物だけでなく、文字通り万事を判別することが大切である。

### （4）ほんとうに良いものを堅く守る。

見分けた結果、それが聖書の教えと合致するなら、それを堅く守る必要がある。

御霊の賜物は、ないがしろにするのも、無批判に受け入れるのも間違いである。

### （5）悪はどんな悪でも避ける。

悪い預言だけでなく、すべての悪を避けるということ。

ここには、誤った教理も含まれる。

## 3. 超自然的助け（5：23～24）

5:23 平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリスト

の来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように。

5:24 あなたがたを召された方は真実ですから、きっとそのことをしてください。

- (1) パウロは、テサロニケのクリスチャンたちのために祈っている。  
彼らの聖化が完成するように。  
そのことを為してくださるのは、「平和の神ご自身」である。
- (2) 「あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように」と祈っている。  
人間が3つの構成要素から成っていることを教えているのではない。  
聖書が教える人間性とは、「不可分な統一体」である。  
ここでは、人間存在のすべてが守られるようにという祈りになっている。
- (3) 私たちをこの世から召し出された神は真実なお方である。  
約束されたこと(救いの完成、聖化の完成)を必ず成し遂げてくださる。  
私たちの救いの確かさは、真実な神にかかっている。

## ・むすび(5:25~28)

### A. 個人的願いと勧告(5:25~27)

5:25 兄弟たち。私たちのためにも祈ってください。

5:26 すべての兄弟たちに、聖なる口づけをもってあいさつをなさい。

5:27 この手紙がすべての兄弟たちに読まれるように、主によって命じます。

- (1) 今度はパウロが、祈りの要請をしている。  
彼は、執りなしの祈りがなければ、働くことができないことをよく知っている。  
パウロは、謙遜な姿勢と神への信頼を表明している。
- (2) 互いに兄弟愛を示すように。  
この時代のこの文化では、「聖なる口づけ」が兄弟愛の表現法であった。  
文化的なものと普遍的なものを見分ける。  
文化的なものの底にある普遍的真理を、私たちの生活の中で実践する。
- (3) この手紙が諸教会でも読まれるように。  
神のことは、隠しておくものではなく、言い広めるべきものである。  
この頃には、使徒の手紙が回状書簡として諸教会で読まれるようになっていた。

### B. 祝祷(5:28)

5:28 私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたとともにありますように。

(1) パウロはこの手紙を、神の恵みを祈る祈りで終えている。

神の恵みは、イエス・キリストを通して与えられる。

神の恵みは、常に信者とともにある。

これは、信者がその事実をさらに深く知り、体験するようにという祈りである。



無断複製・転載を禁じます

2014年7月開催